先師戒浄上人を偲びて

芦屋市　杉田　善孝
光明会本部聖堂主管

生家が大阪であるものですから、その頃京都の学校まで通学するには時間がかかりました。それで縁故をたどって洛東南禅寺の板倉子爵の別荘に寄宿する事となりました。当時別荘には吹田の寺西様の御母さんとお手伝いさんがお留守していられました。この寺西様の奥さんの御妹が光明会の木村恭さんであったので、寺西様のお母さんが病気され看病に来られたのが御縁で、勧められる儘に流感の予防注射に熊野神社角の恒村先生宅に参上したのが光明主義との出合いの始まりでした。昭和四年の秋であったかと思います。京都学生光明会の土曜会にも出席しました。朝念仏にもとぎれとぎれながら通いました。「念仏の目的は見仏、択法についての聖者の真精神は相好」と先輩から教わりました。恒村先生からは『ミオヤの光』所帰の巻を記念に頂き、御遺稿『光明の生活』続いて『人生の帰趣』を買い求めて読みふけりました。

当時、世界的規模をもって階級闘争の嵐が吹き荒み、日本もその例外ではありませんでした。学園内では戦前ながら言論自由の空気が横溢する中で紛争の絶え間なく、マルクス『資本論』の翻訳者長谷部文雄、フィルファーデング『金融資本論』の翻訳者林要、その他住谷悦治等の教授連が侃々諤々（かんかんがくがく）の論陣を張っていました。「観念論と唯物論」の対立は古代から現代に至る哲学史全体を貫いており、しかも唯物論はつねに反宗教的、無神論的性格を持って、進歩的階級の思想の代表者だと唯物論サイドでは主張しています。宗教、殊に光明主義と唯物論とが相前後して私の心の中に入り大変煩悶しました。「これを決択して下さるのは笹本上

人だ」と先輩達は申します。その上人のお別時が十一月三日から一週間大阪中央光明会の主催で成道寺で行なわれると聞いて喜びましたが、笹本上人は大谷仙界上人にそのお別時をお譲りになり、これが大阪における大谷上人御結縁の最後となりました。

確か昭和五年の夏だったと思いますが、修道院の学生一行三昧会に初めて参加しました。朝三時起床から夜九時就床まで激烈な修行でありましたが、当時京大建築科卒業の田中沖平先輩と仏専（今の仏教大学の前身）学生の岩本瑞厳師とが在院中でした。午後一回田中先輩は『光明の生活』と唐沢山別時参加の時の笹本上人御法話の筆記ノートを拝読して下さいました。私は弁栄戒浄両祖の御指南通り開目閉目の修行を何の抵抗もなく教の如く修行しようとつとめて大変有難かったことです。その中には今仙台にいられる和田上人も参加していられたが、結衆の中に旧制松山高校出身の京大法学部在籍の長縄忠さんもおられました。同氏はその後間もなく慧眼法眼の初歩を開かれた方であるが、もと熱心なクリスチャンであり、松高時代は教室で三十分間も祈祷を続けられたという、キリスト者として希有なキャリアの持主であります。恒村先生はその時お忙しかったが一度来て御指導して下さいました。確かその次の学生別時の時だったかと思います。「杉田さん、ここにこうして私共はいて、あの谷川のせせらぎの音を聞いていると思っているが、実は聞いている本当の自分はあの聞えている谷川の音の所にある」と長縄さんは申します。私共は普通自然発生的に外界は我々の意識から独立した客観的存在だと思っております。素朴的なものではあるが、唯物論的見方をそのまま容認する素地を生来私共はもっています。「この問題も結局笹本上人の〝真実の自己〟のお話を聞けば氷解する」とまた先輩達は申します。けれど昭和五年は遺憾乍ら上人にお遇いする機会は関西にはなくて過ぎ去りまし

た。その間「宗教と唯物論との課題」を解こうと修行と研究に自分なりの努力をし、上人に値遇の日を一日千秋の思いで待ちました。

昭和六年三月二七日より三日間、大阪中央光明会と大阪青年学生光明会主催のお別時が成道寺で開かれる事を知り、跳ぶ様にしてそれに参加しました。愈々御法話の時間となって上人は黒板の前に立たれました。お話は『宗祖の皮髄』七九頁の「霊験の種々なる方面」でありました。(『人生の帰趣』三版三六七頁、四版では三八五頁参照)上人の御説法は当時の私にとっては初めて聞くお話でもありはっきり分らなかったのですが、唯お話し下さっている上人の神々しいお姿を食い入るようにじっとお見詰めしていました。すると上人のお体からうすく明るい金色の光が放たれ、本堂の天井も柱もすべて碍えることなく、上人のみ独りその中心にあって莞爾として御説法を続けていられました。小生はそれを見奉って三拝九拝致しました。後で思いますに、これは上人の業光を拝したのであると。業光は三昧の眼で見えますが、肉眼でも感応道交によって見る事が出来ます。又カメラに写るものもあります。昭和十二年四月十五日より五日間光明会大阪支部主催のお別時が成道寺で開かれた時、上人のお部屋に参上し、前三後一の礼をとって入弟子の御礼を申し上げたところ、上人は即座に「はい、もとよりの因縁で」と仰いました。初対面の時に上人の業光を拝しましたのもそういう宿世の御因縁の然らしむる所ではないかと愚考されます。

そして昭和六年十月七日より五日間洛東岡崎公安院における上人御指導の京都光明会主催の如法別時会と又その次の学生別時に参加しまして、年来の課題である第一ハードルを乗り越えさせて頂きました。しかし今日では物質の概念を人間の実践を媒介として人間社会にまで拡大したというのが高められた唯物論の最高

形態だと主張されます。しかし私共は心を肉体という物質によって四次元的に表現しますが、三次元空間を実感することは出来ても、悲しい事に四次元の時空を頭の中で思い描くことは出来ません。四次元の時空の真相ははっきり実感出来ず、しかもその三次元的截面を認識し経験する能力しか私共にはありません。この截面は物質の世界です。「覚り（性、永遠の生命）と四次元の時空との係り合い」、これが次に是非共越えなければならない第二ハードルとして、その後の私のお念仏の障碍となって登場し、その解決に困り抜きました。

しかし、これも如来様（師父聖者は如来様と聖きみ国で一如）と笹本上人の御力によってお念仏精進の障碍にならぬという意味で越えさせて頂きました。誠に上人の恩徳の広大なる、身を粉にしても報い奉ることは出来ません。思い起せばいそとせの昔、行歩拙き幼少の私共を残して上人は忽然として化を遷し給いました。青天の霹靂とは正に此の事でありました。けれど獅子は生れた子を千仞の谷底に投げ込むとか申します。思えばこれも上人の凡愚には測り得ない無尽の大悲と合掌させて頂き、光友相寄り扶宗護法の決意を誓い合った事も昨日の如くであります。

大ひなるつとめ果して師の君は心かろくも帰りましけむ
鷲の谷の清き流れを知りたくばこゝ神奈川の瀬音にぞ聞け
法のため身をも心も捧げてむ承けし教の光り伝へて